

染谷泰正先生に感謝を込めて

外国語学部長
外国語教育学研究科長
竹内 理

染谷泰正先生が関西大学に在籍されていた期間は、わずか7年間という短いものであった。しかし先生は、この期間をきわめて密度の濃いものとして、疾風の如く「駆け抜けて」行かれたように思う。

染谷先生が、前任校から本学へ着任されたのが2010年。そのわずか3年のちには、外国語学部の新カリキュラムにおいて、通訳翻訳プログラムを立ち上げる原動力として活躍されていた。また2014年には、大学院外国語教育学研究科の博士課程前期課程プログラムの3領域化において、通訳翻訳領域の立ち上げに大きな役割を果たされた。これら2つのプログラムが、先生の思い描かれた通りのものになったかどうかは定かではないが、本学部における通訳翻訳学の発展の礎となったことは、疑う余地がない。

ここまでのご活躍だけでも驚きに値するが、2015年から中心となって取り組まれた全学外国語（英語）教育改革は、その範囲と作業量を考えると、まさに目の眩むようなスケールのものであった。もう20年越えて（この間、先人達は何度も試みたのだが）十分な改革が実現できなかったこの分野へ、敢えて切り込まれた心意気は、皆が感服するものであった。ただし、この道は長い茨の道であり、全員の合意形成を何よりも重要視する関西大学のやり方に対しては、先生は大いにストレスを溜められたことと思う。難産を極めたこの改革も、幾多の紆余曲折を経ていよいよ完成年度を迎えた。これもまた、先生の描かれた目的地からは少し逸れてしまったかもしれないが、その背後にあるビジョンに関しては、同僚たちの中に、十分に根づいたものと信じている。

この間、先生は研究者としても大いにご活躍になられ、TILT（Translation and Interpreting in Language Teaching）の分野を開拓され、研究成果の一端を、2017年に編者として出版された *Consecutive notetaking and interpreter training* (Routledge) にまとめられた。上述した教育改革に費やされた膨大な時間と労力を考えると、その間に、よくぞこれだけの研究をされ

たものだと、ただただ驚くのみである。これまでも「染谷のレマリスト」などで、コーパス研究の分野においてその名を知られていた先生だが、通訳翻訳研究の分野でも1つのランドマークを打ち立てられたことに、心から喝采を送りたいと思う。

先生と接していて、この人こそ「全共闘世代の闘士」だ、という感覚をもったことがしばしばあった。全共闘世代を、1965年～1972年までに高校・大学生活を過ごした人物たちであると定義すれば、まさに染谷先生にあてはまる。しかし、そのような時代区分の問題ではなく、人生への向きあい方や問題への取り組み方、そしてその処理の仕方が、私にそのようなイメージを抱かせる原因となったのであろう。その凄まじいまでの一途さは、私たちのような後の世代の人間には真似のできない、畏敬に値するものだ。“It is dogged that does it.”とは、彼の行いを形容するにふさわしいコトバであろう。

ここ1-2年は健康を害されたこともあったが、最近では、日々ウオーキングをされ、あれだけお好きだった煙草も止められ、体重も少し増やされたと伺っている。ご退職後は、好きなことだけに一途に取り組まれ、健やかに過ごしていただければと、祈ってやまない。

ありがとうございました、染谷先生。